『西の国の美女』二部作におけるノスタルジックなモロッコ表象

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石橋, 敬太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000132

『西の国の美女』二部作における
ノスタルジックなモロッコ表象

石　橋　敬太郎

序

トマス・ヘイウッド作『西の国の美女』第一部・第二部の執筆・初演の時期は定かではない。それを推測する手がかりとして，劇中のフェス王ムリシェグが実在するモロッコ王アフマド・アル・マンスールを体現し，北アフリカとの貿易をめぐって女主人公ベス・ブリッジィズと交渉していることが挙げられている。第一部の執筆年については，敵国スペインの脅威を払拭するために，イングランド女王エリザベス一世がモロッコとの友好関係を求めて，アル・マンスールと書簡を交わしていた 1600 年から 1603 年頃までと考えられている（MacLeen and Matar 57-59）。第二部の執筆年については, 1631 年の初版本に付された配役表の役者名などから（Bentley IV: 571），あるいは第一部と第二部の両方が同年に出版されているとして（Cromwell 59），1630 年頃と推測されている。その頃の劇場では，クリストファ・マーロウの『タンバレイン大王』第一部・第二部（1587）に端を発したモロッコやトルコを題材とした新作の上演が終焉を迎えていた。ヘイウッドの『西の国の美女』二部作は，事実上，イスラーム国を扱った最後の作品となったのである。本劇を除く作品では，対スペイン外交上，経済的な結びつきを政治的に利用するエリザベス女王の親モロッコ・トルコ政策を前にして，両国が残酷で野蛮な国として描出された。モロッコを題

材とする主な作品として，ジョージ・ピール作『アルカザールの戦い』（1589）やトマス･デッカー作『欲望の支配，あるいは淫らな王妃』（1600）などが挙げられる[1]。ピールの作品では，同じイスラーム教のトルコとの同盟関係にありながら，その支配から解放されようとして同国の大敵スペインと手を組むモロッコの外交政策がトルコ人，スペイン人，ポルトガル人やイングランド人など「全世界が見ている前」（1 幕 1 場 27 行）で再現される。デッカーの作品においては，スペインの捕虜となったモロッコ王子エリエーザーがフェリペ二世の王妃ユージニアの愛欲をもとに，裏切りによって王位に就くまでの野望と，それに対する恐怖が綴られる。

反モロッコ感情に訴える演劇作品が次々と執筆・上演されたなかで，同国を友好国として描くヘイウッドの作品がかなり異色な存在であったことは想像に難くない。それぞれの作品の執筆年には開きがあるものの，内容的には密接な関連がある。劇中では，プリマスの居酒屋の女主人ベスが多数の貿易商人などを相手として，店を切り盛りしており，彼女の貞節を疑うキャロルを殺害した恋人スペンサーとの別離と再会がスリリングに描かれる。その間，フェス王ムリシェグやフローレンス公の執拗な愛に苦しみながらも，ベスとスペンサーとの結婚が認められるまでのアクションが展開する。その主な批評は次のとおりで，キャスリーン・E・マクラスキー

1　マーロウ，ピールやデッカーの作品のほかに，モロッコやトルコを題材とした主な作品として，ロバート･グリーン作『アラゴン王アルフォンサス』（1588），同『狂えるオーランドー』（1588），同『トルコ皇帝セリムの悲劇』（1591），トマス・キッド作『ソリマンとパーシダの悲劇』（1592），ウィリアム・シェイクスピア作『タイタス･アンドロニカス』（1594），同『オセロー』（1604），ジョージ・ウィルキンズ，ジョン・ディーおよびウィリアム・ローリー共作『英国三兄弟の旅』（1607），ロバート・ダボーン作『トルコ人になったキリスト教徒』（1611），トマス･ゴフ作『勇気あるトルコ人』（1618），同『荒れ狂うトルコ人』（1618），ジョン・フレッチャー作『島の王女』（1621），フィリップ・マッシンジャー作『背教者』（1623-23）などが挙げられる。

（Kathleen E. McLuskie）は，スペンサーに対するベスの貞節や，ムーア人に捕らえられたキリスト教徒の救済にあたる博愛主義などを指摘する（138-43）。ベスの身体表象に着目するジーン・E・ハワード（Jean E. Howard）は，どのように彼女にジェンダー，民族，セクシャリティやナショナル・アイデンティティが表現されているのかを分析する（101-17）。バーバラ・フックス（Barbara Fuchs）は，ムーア人とイングランド人との近似性を見出して，イングランド人のムスリム化に光を当てる（129-34）。こうした批評の動向に対して，ダニエル・ヴィトカス（Daniel Vitkus）は，イスラーム教徒との文化的な接触をもとに，ベスのキリスト教徒としての女性の美質や価値を明らかにする（128-41）。さらに，ジェラルド・マクリーンとナビル・マーター（Gerald MacLean and Nabil Matar）は，イングランドとモロッコとの政治的および経済的な文脈に作品を位置づけて，本劇のプロパガンダ性を強調した（57-61）。

ベスの身体表象に着目した批評や執筆当時のイングランドとモロッコとの接触を文脈としたいずれの批評も説得力があるのだが，第二部でムーア人のパシャであるジョファーのキリスト教への改宗の時局的な意味については深く論じられていない。すなわち，第二部が執筆・上演された時期，モロッコやトルコとの商取引に際して，イングランド人商人やジョン・ウォードのような海賊がイスラーム教に改宗することはあっても，ムスリムがキリスト教に改宗することはほぼありえなかった。むしろ，イスラーム教の支配者や貿易商人たちは，ユダヤ人やキリスト教徒を改宗させ，アルジェのほか，バーバリー地域（テュニスやトリポリを含む北アフリカのオスマン・トルコの摂政管区，および同国の勢力から独立・自治を維持していたモロッコ王国）で展開する中央市場に彼らを取り込み，利益を上げていた[2]。言い換えれば，こ

2　周知のように，イングランドの海外市場は，1550 年を境として織物輸出を中

れらの地域での経済的コミュニティの基盤を支えるために，キリスト教徒などの商人や海賊はイスラーム教への改宗を求められたのである。なかには，捕虜となり，身代金を支払えないイングランド人も改宗を余儀なくされた。

このようにイングランド人がムーア人の圧倒的な宗教的および経済的な力に直面していたこと，またヘイウッドのムリシェグがイングランド人の名誉を美徳する精神を認め，キリスト教国に対する理解を示したことを考慮に入れるとき，ジョファーの改宗にはイングランド人の精神的な優位性を示そうとする劇作家の意図が垣間見える。おりしも，イングランド王ジェイムズ一世は，北アメリカに植民地を求めていた。しかも，イスラーム諸国の脅威を回避するためもあって，イングランド人商人の目は，莫大な利益をもたらす東インド諸島に向けられていた。この地域での独占貿易をめぐってオランダとの争いに敗北した後には，イングランドはインド本土に貿易の拠点を設立した。モロッコは次第に遠い存在になりつつあったのである。そうしてみると，少なくとも『西の国の美女』第二部が執筆された時期には，友好国としてのモロッコはノスタルジックに描出されたのではなかろうか。ヘイウッドにとって，灼熱の太陽と抜けるような青空のもと，人々で賑わうバザーや異国情緒に満ちたモロッコの生活は理想的に映ったのであろう。以下においては，『西の国の美女』二部作をそれぞれ執筆された時期の地中海におけるイングランドの経済政策に位置づけ，ムーア人のキリスト教への改宗の時局的な意味やプロパガンダ性について考察して，これまでの批評を一歩前進させてみたい。

心としたドイツ，低地諸国など北ヨーロッパ市場から，輸入貿易に依存するペルシャ，モロッコ，トルコや東インド市場に推移した。なかでも，バーバリー地域は，キリスト教世界とイスラーム教世界との政治的および経済的な駆け引きに開かれており，ヨーロッパ諸国にとって生き残りをかけた生命線の一つであった（Brenner 3-5）。イングランド人商人たちは，ポルトガルやスペインと海上貿易の覇権を求めて激しく争っていたのである。

I

1600年頃に執筆されたヘイウッドの『西の国の美女』第一部では，キリスト教に寛大であり，イングランドの友好国としてのモロッコが示される。その手始めとして，冒頭の場面において1596年のエセックス伯ロバート・デヴァルーのアゾレス諸島遠征を背景とし，艦隊が結集する港町プリマスで，スペンサーと居酒屋の娘ベス・ブリッジィズとの熱烈な恋が描かれる。ベスの貞節を疑うキャロルを殺害した後，スペンサーはアゾレス諸島の一つファイアル島に遠征するが，船長同士の争いのなかで重傷を負ってしまう。やがてスペンサーの死の虚報がベスに伝えられ，彼女は恋人の遺産をもとに「ニグロ号」を仕立てて，彼の遺体を求めて旅に出る。その間，回復したスペンサーは，航海を続けているうちに，彼の船がスペイン船に捕らえられ，その船がベスの乗り込んだ船に拿捕されたときに彼女と再会する。再会の後で，ベスはスペンサーたちとともにフェス王ムリシェグの宮廷を訪れる。ムリシェグは，国内の騒動を収めたばかりであり，「フェスと大モロッコの王」（“King of Fez and great Morocco”）（『第一部』，4幕3場4-5行）[3] として法律を制定するほか，王国の安全と国庫を拡大することに余念がない。なかでも，貿易を規定する法律に対して，彼は並々ならぬ手腕を発揮し，関税を避けようとするキリスト教徒の商人には船と財産の没収も厭わない。そのフェスの宮廷で，ベスはイングランドの外交団の代表であるかのように（D’Amico 88），北アフリカ沿岸で商取引をする際の港湾の利用や安全な通行などの契約を交わす。ムリシェグも，彼女を「世界中で最も有名な処女王，力強い女帝」（“The virgin queen, so famous through the world, / The mighty empress”）（『第一部』，5幕1場89-90行）

3　以下，ヘイウッドからの引用ならびに幕・場・行数は，*The Fair Maid of the West Parts I and II* , edited by Robert K. Turner Jr.（U of Nebraska P, 1967）に拠る。

エリザベス女王にたとえ，執筆当時の両国王の友好関係を物語る。

事実，エリザベス女王は，貿易を基盤とした友好関係と，敵国スペインを打ち倒すための軍事的な同盟を模索するために，モロッコ王アフマド・アル・マンスールと書簡を交わし続けていた（MacLeen and Matar 61）。エリザベス女王としては，対スペイン外交上，アル・マンスールが彼女を必要としている以上に，彼を必要としていた[4]。タイロン伯ヒュー・オニールを指導者とするカトリックのアイルランドの反乱を鎮圧するためのエセックス伯の遠征もあって，すでにイングランドの国庫は枯渇しており[5]，モロッコの金や資源がイングランドの防衛に重要であることを，彼女は知っていたのである。しかし，多くのイングランド人にとって，アル・マンスールは軍事力と政治的洞察力を兼ね備えた恐ろしい人物であった（MacLeen and Matar 61）。北アフリカでイスラーム教への改宗を求められたイングランド人も少なからず存在しており，モロッコは宗教的な脅威でもあった。このような時局的な状況のなか，終幕近くでパシャのジョファーはムーア人の改宗をもくろむキリスト教の説教師を宮廷に連れてくる。

A Christian preacher, one that would convert

4　1598 年のフェリペ二世の死を契機として，モロッコ王アフマド･アル･マンスールはレコンキスタ以来のスペイン征服をもくろんでいた。すでに，アル・マンスールは，スペインによって占領された北アフリカの都市セウタ攻撃をスペインからの亡命者に指示していた。彼の野望を実現すべく，1600 年 8 月には，モロッコ王の使節団がロンドンを訪れて，イングランドとの軍事的な同盟を求めた（Matar 24-25）。

5　1599 年 3 月，エセックス伯は，イングランドのアイルランド支配を脅かすタイロン伯の反乱を鎮圧するための遠征を行った。この遠征のために，エリザベス女王と枢密院は，1 万 7 千人余りの兵と巨額の費用を用意した。しかし，窮地に追い込まれて，補給を求めたエセックスの申し出は，財政難によって拒絶された。これにより，エセックスは，タイロンと和約を結び，女王の許可なく帰国した（Black 428-29）。イングランドの財政はかなり悪化していたのである。

Your Moors and turn them to a new belief.

(*Part I*, V. ii. 73-74)

もちろん，イスラーム教を信仰するフェスでは，この説教師のもくろみは死に値する。ただし，第一部が執筆された少し前，ピールやデッカーなどが描いた宗教をものともせず，裏切りを常套手段として権力を手に入れるムーア人表象とは対照的に，ベスの懇願によって彼の死が免れたことは注目に値する。ヘイウッドは，ベスをフェスに到着させ，この国の王を魅了してイングランドとの友好を推進させる。しかも，改宗はともかくとして，彼女はムリシェグをキリスト教に寛大にさせる。後になってわかるように，この説教師によって異教の国フェスでベスとスペンサーの結婚が執り行われる。そして，ベスに対する愛に溺れ，彼女の願いや拒絶に従順となるムリシェグを見た観客は，大いに満足したことであろう。そのように考えてみると，劇作家はムーア人が宗教的な脅威ではないことを観客に強く印象づける。そのことはとりもなおさず，エリザベス女王の親モロッコ政策を支持する劇作家の姿勢を映し出しているといえよう。

II

それでは，1630 年頃に執筆されたヘイウッドの『西の国の美女』第二部についてはどうであろうか。その頃のイングランドの関心はインド本土に向けられていた。すでに 1612 年には，スーラトやボンベイの北にあるタプティ川河口に工場や貿易本部を建設する許可がムガル皇帝ジャハーンギールによって認められていた（Davies 322）。また，ペッパー，クローヴやナツメグなど莫大な利益を生む東インド諸島との独占貿易をめぐって

オランダとの争いに敗れた結果[6]，イングランドはインド内陸部に貿易の活路を求め始めたのである。そのような時期に，第二部では，ムーア人がイングランドの精神文化を共有していることが示される。このことについて考察するにあたり，ベスに溺れるムリシェグに相手にされない王妃トータが夫への復讐としてスペンサーを求め，またベスをものにしようとする王に対してベッドトリックが行われているすきに，イングランド人たちが「ニグロ号」に逃亡する場面に注目してみたい。この場面では，看守に見張られているスペンサーは，後に彼らと合流することを約束していたのだが，逃亡中に武装した王の部下を殺害したことにより，パシャのジョファーに捕らえられてしまう。合流の前に約束の時間に「ニグロ号」に到着しなければ，亡き者とみなすよう彼はベスに伝えていた。

ここで着目すべきは，王の部下との戦いのなかでスペンサーに勇気と気高さを見出したジョファーが彼に共感するほか，涙にくれる理由を彼から探り出そうとしたことである。彼の男らしさと涙の矛盾がジョファーを混乱させる。続けて，ムーア人は涙で溶ける心をもっているのかと，彼は自問する。スペンサーがその胸の内を開いたとき，ジョファーは彼の思いを知る。そして，パシャは，彼にベスと会って，生きていることを彼女に告げることを認める。

You have deeply touch'd me, and to let you know
All moral virtues are not solely grounded
In th'hearts of Christians, go and pass free.

6　イングランド人による東インド諸島干渉は，1623 年 2 月アンボンでのオランダ人によるイングランド人商人大量虐殺へと展開し，その後のこの領域でのイングランドの地位は永久に弱体化した（Davies 53）。

Keep your appointed hour; preserve her life.
I will conduct you past all danger, but withal
Remember my head's left to answer it.

(*Part II*, II. vi. 96-101)

野蛮で残酷であると評されるムーア人にあって，ジョファーはキリスト教的な倫理的美質を自らに見出す。その倫理的な美質がスペンサーのアクションの原動力となるとともに，後にジョファーがキリスト教に改宗する要因にもつながる。すなわち，スペンサーは，船に残ることを望むベスの思いを拒絶して，イングランドの名誉と宗教にかけて，ムーア人の宮廷に戻り，真のキリスト教徒であることを示し，ジョファーの共感を高めていくのである。

その間, ジョファーのキリスト教的な倫理的美質とはきわめて対照的に，イングランド人たちに罠をかけられたうえに，逃亡されたことを知ったムリシェグは，彼らに復讐する計画を立てている。なかでも，スペンサーが戻ってこなければ，ジョファーはムリシェグの怒りを免れられない。しかも，フェス王は，キリスト教徒の気高さに懐疑的であり，その名誉のために妻や自由を捨てることを疑ってやまない。名誉を求めてスペンサーと競い合うパシャは，王に「スペンサーが戻らなければ，これを私の名誉としてくださいますよう，陛下。私は流血しますが，ムーア人はキリスト教徒に勝っておりました」(“If he comes not, / Be this mine honor, King: that though I bleed, A Moor a Christian thus far did exceed”)（『第二部』，3 幕 3 場 32-34 行）と述べて，死によって彼の民族，文化や宗教から解放されることを強く望む（D'Amico 96)。

III

スペンサーがジョファーとの約束を守り，宮廷に到着したとき，フェス王ムリシェグは彼の騎士道精神に驚嘆する。また，イングランド人が海賊であり，モロッコから盗みをはたらいているとの非難に堂々と異議を唱え，前に受け取った贈物を侮蔑して返却し，死を望むスペンサーに，フェス王は驚きを隠せない。ムリシェグの穢れた利益とイスラームの力に対する侮蔑をとおして，スペンサーはイングランド人の名誉を強調する。地上の神として，快楽にむせかえるハレムを求めるフェス王も名誉を重んじており，そのせめぎ合いに敗れることを拒む。ちょうどそのとき，ベスが宮廷に登場して，彼女の船や略奪品と引き換えに彼にスペンサーを許すように懇願する。ムリシェグの沈黙を前にして，ベスが次のように述べるとき，フェス王は再びイングランド人の勇気と気高さに気づかされる。

> Why pause you, King? Is't by our noble virtues
> That you have lost the use of speech? Or can you think
> That, Spencer dead, you might inherit me?
> No, first with Roman Portia I'd eat fire,
> Or with Lucretia character thy lust
> 'Twixt these two breasts.
>
> (*Part II*, III. iii. 129-34)

スペンサー亡き後にムリシェグと結ばれることになるなら，ブルータスの妻ポーシャやタークィンに凌辱されたルークリースといった夫に対する高尚な誠実さと決意を名誉とするローマ人の女性のように死を選ぶと，ベスはいう。繰り返しになるが，ムリシェグにとって，イングランド人の勇気

と名誉のせめぎ合いに打ち負かされることは恥辱でしかない。彼らの勇気と自らの「有徳な行為」(“virtuous deeds”)(『第二部』, 3 幕 3 場 140 行)に匹敵すべく，ムリシェグはスペンサーを許し，以前与えた二倍以上の財産を彼に与える。ジョファーは，その勇気と名声ゆえにアルジェの総督に任命される。ここには, 地中海における貿易による商業上の利益ではなく, イングランド人とムーア人との気高さや名誉といった騎士道精神を求めるせめぎ合いが色濃く示されている。

もう一つ見逃せないのは，スペンサーがムリシェグの博愛をキリスト教国中に広めると約束し，ベスがイングランドの詩人に彼に対する称賛を奏でさせると述べたことである。もはや，劇作家は 1630 年頃の地中海におけるムーア人とイングランド人との関係に関する事実を離れている。たとえば，アレッポやテュニスのイングランド人商人は，莫大な利益を望んで，これらの貿易都市の役人に追従していた。ムリシェグ称賛について，ダニエル・ヴィトカス (Daniel Vitkus) は,「帝国拡大を求める悪意に満ちたイングランド人の望みを隠蔽するか，抑圧するための不安な試み」と解釈する (139)。しかし，依然としてモロッコをはじめとするイスラーム諸国の経済的な優位に対するイングランド人の脅威を考慮に入れるなら，スペンサーたちによるムリシェグ称賛には，ときのイングランド人のムーア人に対する精神的な優位を観客に訴えようとする劇作家の思いが描出されている。

IV

続く場面において, イングランドへ帰国の途中, 大嵐によってスペンサーとベスは離れ離れになるが，イタリアのフローレンスで再会する。彼らはフローレンス公に雇われる。公爵はベスに執拗に迫るものの，最終的にス

ペンサーとベスの愛を認める。これら一連の出来事のなかで重要なのは，公爵がジョファーを逮捕した場面である。ジョファーはイタリアの海軍大将ペトロによって捕らわれて，囚人として連れてこられたのであった。モロッコで気高い人物と評価されていた彼は，隷属よりも死を望む。そのとき，ジョファーに気づいたスペンサーは，彼を「立派な友人」（“noble friend”）（『第二部』，5 幕 4 場 157 行）であるとして，フローレンス公に自らの財産と自身を差し出し，彼を故国に返すように申し出る。この申し出を聞いた公爵は，身代金もなくパシャを解放することに同意する。そして，彼らキリスト教徒の「名誉」と美質を確信したパシャは次のように述べる。

> Such honor is not found in Barbary.
> The virtue in these Christians hath converted me,
> Which to the world I can no longer smother.
> Accept me, then, a Christian and a brother.
>
> （*Part II*, V. iv. 184–87）

ムスリムがキリスト教徒によって改宗するのは，本劇が最初ではない。それは，ロバート・グリーンの『トルコ皇帝セリムの悲劇』（1591 年）に登場するセリムの兄コルクトにもみられた。哲学などの学問に造詣は深いが，支配者としての資質に欠けるコルクトは，セリムによる暗殺を恐れてロードス島へ逃亡中にイングランド人キリスト教徒ブリスブランブルの言葉に心を動かされて改宗した。後の 1624 年 8 月に初演されたフィリップ・マッシンジャーの『背教者』では，ヴェネツィアの平信徒ヴィテリがトルコ王女ドヌーサをキリスト教に改宗させる。そして，洗礼の水に浄化の力があ

るとして，彼は彼女の顔に水を浴びせて洗礼を施す。ヘイウッドのジョファーは，ムーア人にはない名誉と気高さをスペンサーに見出して，キリスト教に改宗する決意をする。彼はスペンサーと同じく勇敢で，礼儀正しく名誉を尊ぶ人物なのである。しかも，フローレンスは，「適切な儀式でそなたの改宗に名誉を与えよう」（“we'll honor your conversion / With all due rites”）（『第二部』，5 幕 4 場 196-97 行）と述べて，ジョファーの改宗を祝福する。そして劇作家は，ムーア人に勝るイングランド人ひいてはヨーロッパ人の精神的な優位性を示すのである。

最終的に，ベスに思いを寄せていたフローレンス公は，ジョファーの改宗を祝福した後で，彼女を「きわめて美しい女性であり，またとても貞節な妻」（“So fair a virgin and so chaste a wife”）（同 200 行）と称賛して幕を閉じる。エリザベス女王にとって，モロッコが貿易，政治的および軍事的な同盟のために存在していたことを背景とするとき，これらの劇にはイングランドの貿易国と定住の未来がサー・ウォルター・ローリーの求めた北アメリカのヴァージニアにあるロアノークではなく，豊かでエキゾチックなモロッコであることが示されていると，マックリーンとマーターはいう（58）。仮にそうだとしても，ジェイムズ一世の海外政策の一つが植民地拡大にあったことも忘れてはならない。植民地建設は，インドのほか，ニュー・ファウンドランド，ギアナ，ヴァージニアやマサチューセッツなどに及んでいた（Davies 321）。1606 年にはヴァージニア会社が設立され，説教，パンフレットやバラッドをとおして，すべての階級の人々の協力を求めていた[7]。その間，モロッコやトルコの宗教的，経済的な脅威を回避するため

7　しかし，ヴァージニア植民地では，タバコ栽培以外に大きな成果を上げることはできなかった。ほかに，1607 年に開拓された東海岸の最北部にあるメインでは，過酷な気候などにより入植の見込みは望めなかった。1608 年にジェイムズタウンに入植した人たちは，食糧不足などにより壊滅的な危機にさらされ

もあって，香辛料，キャラコ，生糸や硝石を求めて，イングランド人商人の目はインド本土に向けられていた。彼らの関心は明らかにモロッコを離れつつあったのである。そのような時代にあって，時局的な色彩を帯びた『西の国の美女』第一部とは異なり，どうやら，第二部は，エリザベス女王の親モロッコ政策やムーア人に対するイングランド人の精神的な優位性をノスタルジックに描いた作品であるといえそうである。

謝　　辞

本研究は，令和５年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（c））（課題番号：21K00359）の成果の一部である。

References

Bentley, G. E. *The Jacobean and Caroline Stage*, vol. IV, Clarendon P, 1956.

Black, J. B. *The Reign of Elizabeth 1558-1603*. Clarendon P, 1936, repr. 1987.

Brenner, Robert. *Marchants and Revolution: Commercial Change, Political Conflict, and London's Overseas Traders, 1550-1653*. Princeton UP, 1993.

Cromwell, Otelia. *Thomas Heywood: A Study in the Elizabethan Drama of Everyday Life*. Archon Books, 1969.

D'Amico, Jack. *The Moor in English Renaissance Drama*. U of South Florida P, 1991.

Davis, Godfrey. *The Early Stuarts 1603-1660*, Second Edition, Clarendon P, 1987.

Fuchs, Barbara. *Mimesis and Empire: The New World, Islam, and European Identities*. Cambridge UP, 2001.

Heywood, Thomas. *The Fair Maid of the West Parts I and II*. Edited by Robert K. Turner Jr. U of Nebraska P, 1967.

Howard, Jean E. "AN ENGLISH LASS AMID THE MOORS; Gender, race, sexuality, and national identity in Heywood's *The Fair Maid of the West*." *Women, "Race," and Writing in the Early Modern Period*, edited by Margo Hendricks and Patricia Parker. Routledge, 1994, pp. 101-17.

MacLeen, Gerald and Nabil Matar. *Britain and the Islamic World, 1558-1713*. Oxford UP, 2011.

Matar, Nabil. *Britain and Barbary, 1589-1689*. UP of Florida, 2006.

続けたのである（Davies 327）。

McLuskie, Kathleen E. *Dekker and Heywood: Professional Dramatists*. St. Martin's P, 1994.
Vitkus, Daniel. *Turning Turk: English Theater and the Multicultural Mediterranean, 1570–1630*. Palgrave Macmillan, 2003.

Nostalgic Moroccan Representations in the two parts of *The Fair Maid of the West*

Keitaro ISHIBASHI

In the context of the succession of plays that appealed to anti-Moroccan sentiments, which had their origins in Cristopher Marlowe's *Tamburlaine the Great, Part I and Part II* (1587), Thomas Heywood's *The Fair Maid of the West, Part I and Part II* were quite unique in their portrayal of Morocco as a friendly country. Conventional criticism has focused on Beth Bridges' physical representation, or on discussions based on the contact between England and Morocco at the time of writing of the plays. However, none of these critiques have discussed the significance of the conversion of Joffer, the Moorish Pasha, to Christianity in *Part II*. While English merchants and pirates such as John Ward may have converted to Islam when trading with Morocco and Turkey at the time *Part II* was written and performed, it was almost impossible for a Muslim to convert to Christianity. Rather, Muslim rulers and traders converted Jews and Christians, and profited from their inclusion in the central markets that developed in Algiers as well as in the Barbary region. To support the economic community base in these areas, Christians and other traders and pirates were required to convert Islam.

Thus, when we consider that the English were faced with the overwhelming religious and economic power of the Moors, and that Heywood's Mullisheg, King of Fez, recognized the English spirit of honour and virtue and showed understanding towards the Christian nation, Joffer's conversion shows the

playwright's intention to demonstrate the spiritual superiority of the English. At the same time during the plays were performed, King James I of England was seeking colonies in North America. Moreover, partly to avoid the treat of the Islamic countries, English merchants had their eyes set on the enormously profitable East Indies and mainland India. Morocco was becoming increasingly distant. In this light, Morocco as a friendly country may have been portrayed nostalgically, at least at the time when *Part II of The Fair Maid of the West* was written.

In this essay, the discussion will place the two parts of *The Fair Maid of the West* in the context of England's economic policy in the Mediterranean at the time when each play was written. As a result, it will be shown that these plays are nostalgic depictions of English spiritual superiority over the Moors, in addition to pro-Moroccan sentiments.